

亡き競歩選手の写真携え

北京でボート出場・浜田美咲さん

戸田市では、ボート軽量級ダブルスカルで2008年の北京五輪に出場した浜田美咲さん(38)が最終区間を走った。浜田さんは1964年東京五輪の20^{キロ}競歩代表で、今年亡くなった石黒昇さんの写真と共に聖火をつないだ。

石黒さんは2度目の東京五輪は聖火ランナーとして地元戸田市を走る予定だったが、だが、コロナ禍で大会延期が決まった昨年から体調を崩し、今年2月、88歳で亡くなった。「競歩はこうやって歩

くんだぞ」。そう言って自宅でおどけながら撮った写真を、長女かおるさん(59)が浜田さんに託した。

学生時代の新聞配達で鍛えた健脚を誇った石黒さんは駅伝選手を夢見たが、大学時代に結核にかかり、競歩に転向。働きながら練習を重ね、五輪出場を決めた。五輪では頭一つ大きい世界の選手たちを相手に奮闘。日本勢最高の記録を残したが23位に終わった。

引退してからは自宅に後輩を呼んで合宿をするなど、現

役選手のため力を尽くした。後輩の活躍する記事を切り抜いたスクラップブックは約50冊にもなる。

「東京五輪を2回も経験できるなんて」と聖火リレーを心待ちにしていた石黒さん。行きつけの飲み屋からリレーで使う車いすも借りていた。

浜田さんは、五輪会場で子どもを連れて歩く女性選手たちに憧れ、出産後も競技を続けた。何度もうけそうになったが、18年の全日本選手権では長男と共に表彰台に立つた。

64年出場・今回走者予定だった石黒昇さん



石黒昇さんの写真と共に走った浜田美咲さん＝戸田市



1964年東京五輪のユニホームを着た石黒さん。浜田さんはこの写真をのばせて走った

自身の経験から、石黒さんが生前に語っていた「若い人には何でもいいから好きなことに打ち込んでほしい。いかその努力が実になる」という言葉に共感した浜田さんは、「石黒さんとともに、この思いを伝えたい」と約150キロを走りきった。「今は先が見えない不安の中で皆さんいろんな我慢や努力をされているけれど、いつか絶対幸せな時が来るはずですよ」

妹らと浜田さんのゴールを見守ったかおるさんは、あふれる涙をぬぐった。「父の魂も天国から降りてきて、一緒に走れたんじゃないかな」

(川野由起、仙道流)